

鬼北町立広見中学校

道徳通信

道徳主任 酒井 智有

NO. 89

令和8年9月11日発行

よりよく生きる

独立行政法人国立青少年教育振興機構から、子どもゆめ基金10周年記念として、過去に学校に送られた「かがやく先輩からのメッセージ」は、子どもたちに向けて送られたメッセージをまとめたものですが、非常によい内容ですので紹介します。

「かがやく先輩からのメッセージ」 竹内 昌治(たけうち しょうじ)

ずっとサッカー少年でした。将来の夢は、もちろんサッカー選手。学校が終わると夜の8時まで練習し、週末は練習試合や合宿へ。おかげで勉強はほとんどできませんでした。図工と体育以外の成績はイマイチでした。本が苦手でした。読解力がないせいか、小説も登場人物が何人もいと誰が誰だか分らなくなるんです。国語のテストで、「主人公の心情」が問われる長文読解は、自信を持って答えても、いつも不正解でした。中学1年生の時、テストで最悪の点数をとってしまいました。思っていた以上に成績がよくないことに焦り、少しずつ勉強を始めました。頭の回転が早いほうではないので、時間をかけて勉強するしかないなと思い、授業も真面目に聞くようになりました。勉強を始めると、新しい発見がありました。国語や歴史で学ぶ英雄の言葉がかっこいいんです。今でも覚えている格言が「燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや」。中国の歴史で「項羽と劉邦」時代の陳勝という人の言葉です。燕や雀のような小さな鳥には大空を飛ぶ大きな鳥の志は分からない、志は高く持つべきだ、という意味です。「なるほどなあ」と思いましたね。勉強しながら励まされているような気分でした。

勉強していろいろなことが分かってきた頃、「東京大学に行きたい」と思うようになりました。テレビで見て、都会の真ん中にあるのに緑豊かで、ゆったりと勉強できるいい大学だなと思ったのです。大学2年生で専攻を決める時、もの作りに興味があった僕は「機械工学」を選びました。そこから研究者を目指すのですが、研究者は論文をたくさん読まなくてはなりません。読書は苦手でしたが、数をこなすうちに活字に慣れ、読解力や論理力もついてきました。僕の専門は「マイクロマシン工学」です。髪の毛の直径よりも小さい機械を金属やプラスチックなどの人工の材料で作る、それを細胞と融合させて超小型のセンサー(計測器)を作る研究です。このセンサーを使えば、より人間に近いロボットができるし、医療に役立つ技術が生まれる可能性もあります。また、僕の研究分野は「異分野融合領域」とも言われています。機械工学をベースに、生物や化学、医療や芸術など、様々な分野をごちゃ混ぜにして新しいものを創る分野です。幅広い世界を学ぶことで、これまで難しいとされてきた課題も全く別のアプローチから解決できるようになります。僕は、「私は文系」「僕は理系」と、早いうちから決めなくてもいいのかなと思います。そのほうが、自分の世界も広がり、何事にも面白く取り組みます。

「とりあえずシュートを打て」。小学生の頃、サッカーの監督に言われていました。研究はなかなか進まず迷うことも多いのですが、少しずつでもゴールをねらって実験結果を出していく。すると、難しそうに見えていたことが、案外簡単に見える瞬間があるんです。いつか生体と機械が融合したロボットが作れるように、これからも研究の世界でシュートを打ち続けていきます。